

〔提 言〕

## 家族ライフサイクル論を見直す

東京大学大学院医学系研究科 (家族看護学)

上別府圭子

家族のライフサイクルのモデルは、前のジェネレーションから次のジェネレーションへ、そしてまた次のジェネレーションへと脈々とつながっている。曾祖母から生まれケアされた祖母は、母を産み育て、祖母から生まれケアされた母は、私を産み育てる。そして、母から生まれケアされた私は、子どもを産み育てる。『娘が（母）親になる』ことの繰り返し、あるいは『ケアされていた者がケアする側になる』ことが繰り返されて、家族の歴史が紡がれてきた。家族の『ケアする』機能が、家族の歴史にとって重要であったことは言うまでもなく、また未来に向けても重要であると言って間違いはないだろう。

さて厚生労働省によると、平成21年度に全国の児童相談所で対応した児童虐待相談対応件数は、44,210件（速報値）であった。子育て世代の44,210組の家族に、どのようなドラマが展開されているのだろうか。

最近、区市町村の保健センターに、祖母世代からの子ども（孫）の発達・養育相談が増えているという。祖母世代（実母や姑）が古い育児方法を押つけてくるとか、泣かせたら可愛そうだからと抱っこしろだのミルクを足せだのと世話を焼いてくるのがたまらないとかいうような、母親世代の葛藤や悩みは古くからあった。今や古典の部類であろうヘレーネ・ドイッチュは、「祖母の心理」に、母として子に十分できなかつたと思うことを、孫との関係や嫁との同一化によって、やり直していきたい心理が見いだされることを記述している。

しかし、相談の場に登場するのは母親世代であった。母親世代の相談に乗ることで、祖母世代からの刺激をうまく受けたり受け流したりしながら、また一方では祖母世代に学ぶ点にも気づき感謝もしながら、

母親世代は子どもの養育ができるようになっていくケースが多かった。

ところがどうだろう、最近では、祖母世代が、相談の場に登場するのだという。こんなケースも聞いた。健常な子どもを出産後に里帰りし、祖母（実母）からの手伝いを期待していた母親が、「何で私が赤ん坊の面倒をみなくちゃいけないんだ、私は赤ん坊が大嫌いなんだ、疲れる、疲れる」と祖母から不満や愚痴ばかり聞かされたため、すっかり不安定になってしまった。そこで保健師が家庭訪問すると、祖母が保健師を独占して、自分の子育てがいかにたいへんであったかを、とうとうと語るのだという。

このケースの祖母は、自分が愚痴を言い話をきいてもらいたい、つまりケアされたい側において、孫を産んで里帰りしてきたわが娘を、ケアする側には立てていない。もっともこの祖母が、生涯、未熟な人格であったかは、また別の話である。わが娘の妊娠・出産・子育てのこの時期であるからこそ、祖母自身の妊娠・出産・子育て時期の葛藤が再燃することは、ヘレーネ・ドイッチュの分析どおりであろう。

子育て世代の家族に展開されているドラマは、非常に複雑である。ここでは便宜上、女系のみで描いたが、『息子が（父）親になる』こと、男性が『ケアする側になる』ことも、困難な課題である。今、厚生労働省がイクメンプロジェクト、イクメンの星などと持ち上げているが、男性たちのナルチズムとマゾキズムを満足させる一時的な流行で終わらせないようにしなければならない。

個人のライフサイクルにおける青年期の遷延が指摘されて久しいが、子育てをめぐるこのような現況を見るに、家族のライフサイクル論も、見直す時期がきていると思えてならない。